



鎧の騎士

朝から空を厚く覆っていた雲が、ついに耐えきれなくなって雨粒を落とし始めた。

ミアンは薬草を摘む手を止めて空を見上げた。「もう少しもつと思っただのに」空に恨み言を言いながら、手早く心臓の形をした黒い葉を5枚ほど摘んで籠に入れた。エプロンを外して、摘んだ葉が濡れないように上にかぶせる。左腕に通した籠を胸に抱え、雨がひどくならないうちに帰ろうと駆け出した。

今日は特別な薬を作るために必要な薬草を摘もうと、森を抜けたところにあるこの岩場まで来ていたのだ。葉を濡らしてしまうと薬効がなくなってしまう。

白茶けた岩に雨が当たって、奇妙な水玉模様が広がっていく。転ばないように気をつけながら森の中へ走りこんだ。

森の向こうまで一気に走るつもりだったが、中ほどまで来て走るのをやめた。息が切れたのと、雨が本降りになってきたせいだ。

いったん降り始めると、雲はこらえ性がなくなってしまったようだった。雨は何千枚、何万枚という木の葉をばらばらと鳴らし、葉の隙間をくぐり抜けて下草を濡らした。ミアンは、まるで屋根のように太い横枝を伸ばしている大木の根元に身を寄せて雨が小降りになるのを待つことにした。

しばらくそこでじっとしていたが、雨の勢いは弱まりそうになかった。冬の匂いの混じった雨は冷たく、ミアンは籠を抱く手に力を入れた。肩口や足先から冷気が忍び寄ってきて、歯がカチカチ鳴った。

やっぱり走って帰ろうか、とあたりを見回したとき、ミアンはあやうく籠を落としそうになった。

彼女のいるところからほんの数メートル離れたところに、鎧に身を固めた人が立っているのが見えたのだ。そんなところに人がいるなんて思ってもみなかった。人の気配など全くしなかったのだ。

(いつからいたのかしら・・・)

さっき駆け込んできた時は確かに誰もいないと思ったのだが、

(そんなにしっかり確かめたわけじゃないから)

と、思いなおした。それよりも、

(びしょぬれだわ、あの人)

鎧の人は枝の少ない所に立っているのか、まともに雨に打たれていた。雨が小さな流れを鎧の上に作っている。

「あの」

ミアンはややためらいながらも思わず声をかけた。

「もしよろしかったらこちらへいらっしゃいませんか？そこよりは少し雨がしのげますよ」

その人にはミアンの言葉がよくわからなかったらしい。面頬を下ろした顔をミアンの方へ

向けたけれども動こうとしない。

「鎧が濡れてしまって……錆びてしまいませんか」

ミアンはなおも言った。その人はようやく自分の体を見て、そのことに気付いたようだった。

「そう——だな。しかしかまわんのだ」

その声は降っている雨よりも冷たく、妙にゾッとする響きを持っていた。どこか具合でも悪いのかもしれない。それならばぐずぐずしている場合ではない。

「でも、お体に障りますよ。あの、よろしかったらうちでお休みになりませんか。私はミアンと申します。家はこの森を抜けたすぐの所にあるんです。粗末な家ですが火はありますし、温かいスープくらいならお出しできますわ」

その人はかすかに身じろぎした。迷っているようだった。ミアンは籠をしっかりと抱え直し、「あとをついてきてください」と言って走り出した。

少し行ってから振り返ると、その人はゆらりと歩きだしていた。あの鎧は重くないのかしら、とミアンはちらりと思った。

思い切って走ってきてよかったと思った。

あれから雨はますます強さを増し、雷まで鳴り出した。あのまま木の下にいたら雷に打たれていたかもしれない。家に着いて急いでドアを開け後ろを振り返った。その人は走ってきた様子もないのにミリアンのすぐ後ろにいた。

間近で見るその人は、どこか妙だった。全身が隙間なく鎧で覆われている。指先までぴったりと金属に包まれていて、どこにも継ぎ目がない。

しかしそのことについて長く考えているひまはなかった。

「どうぞ、お入りになって」

そう言い置いて、バタバタと家の中に駆け込んだ。

まずは暖炉に火を起こした。勢いよく炎が上がるまで薪をくべてから、鍋を火にかける。ふと見ると鎧の人は戸も閉めずに入口に突っ立っていた。鎧からしずくが滴り落ちている。

「鎧をお取りになって、どうぞ火のそばにいらして下さい。じきにスープができますわ」

そう声をかけておいて、ミリアンはしばらく忙しく動き回った。ランプをつけ、濡れた髪をふいた。籠を部屋の隅にある調合台に置き、摘んできた薬草をざっと並べた。エプロンのおかげで濡れずにすんだようだった。

それから暖炉に薪を足し、鍋をかき混ぜた。朝作ったスープが残っていてよかったと思った。戸棚から皿とコップを取り出しテーブルに並べる。

さて、とドアの方を見てびっくりした。鎧の人はさっきと同じところに同じように立ったままだった。

「どうなされましたの？」

「鎧を取ることはできぬ」その人は低い声で言った。

「どうして私を家へ呼んだのか」

ミリアンはますます驚いた。この人は体ではなく心が病んでいるのだろうか、それなら今ちょうどいい薬草があるから、スープではなくその薬を飲ませてあげようかとあれこれ考えながら、できるだけおだやかな声で言った。

「何かいけなかったのでしょうか。雨が降っておりましたし、私の家がすぐ近くだったから少し雨宿りをされればと思っただけですわ」

「本当にそれだけか」

「他に何かありますか。私は女の一人暮らしで、そうね、むしろ心配しなくてはならないのは私の方じゃないかしら。でも、あなたは騎士のようだし、そんな心配は無用でしょう？」

そう言いながらミリアンはおかしくなってきた。まったくそうだ。見ず知らずの人を家に入れるなんて。でもミリアンはいつもそんなふうだった。

いきなりミリアンが笑ったせいか、その人はたじろいだ。

「たしかに私は騎士だが、なぜ騎士なら心配はいらぬというのだ」

「だって、騎士道とかいうものがあるというではありませんか。女や子供には危害は加えないも

のだと聞いたことがあります」

「ふむ、なるほど」

ようやく騎士はミリアンがただの親切心で自分を家に入れたのだということを理解したようだった。

「鎧はお取りにならないのですか」

「そうだ」

ミリアンはこれ以上言うのをやめた。騎士が取りたくないというのだからそれ相応の理由があるのだろう。

「では、何か拭くものを持ってきます。とにかく水気だけでも拭き取らなくては」

なるべくきれいな布を探し、騎士に渡した。脱ぎたくないくらいなもの、他人に触られるのはいやだろうと思ったのだが、結局ミアンが拭いてやることになった。騎士の手つきがあまりにもぎくしゃくしており、全部拭き取るのにかなり時間がかかりそうだったからだ。

やっと拭き終えて暖炉の前の椅子に座らせ、スープを出す段になってまたひと悶着あった。ミアンが皿によそったスープを、いらないと断ったのだ。

「おなかがすいてないのですか。たいしたものではありませんけど、体は温まりますよ。それとも、飲み物の方がよかったかしら」

それもいない、と騎士は言った。

ちょっとむっとしたけれども本人がいないものを無理に勧めてもと思い、騎士に断って自分だけスープを飲むことにした。

朝から一日置いておいたので具がなじんでいっそうおいしいスープになっている。ああ、おいしい、と息もつかずにスープを飲みほした。思っていたよりおなかがすいていたらしい。

おなかがほんわり温まって、ミアンはやっと心地がよかった。椅子を暖炉の前に運び、騎士と並ぶ。

騎士はぼんやり炎を見ているようだった。ようだった、というのは、彼はずっと面頬を下ろしたままで――それはさっき鎧を拭くときにミアンが上げようとして厳しく咎められたのだが――どこを見ているのかははっきりわからないのである。

風が出てきて雨が打ち寄せる波のような音をたてている。ミアンは騎士の面頬で踊る炎の影を見るときも見ていた。体がとろけて眠ってしまいそうだった。

その時ふいに騎士が言った。

「あなたはここに一人で暮らしていると言われたが、それはどうしてなのか。ここは村のはずれのように思われるが」

ミアンははずり落ちた体を立て直しながら答えた。

「ここは村の人たちが私のために建てて下さったの。私は薬草を摘んで薬を作り、それを売って暮らしています。時々魔法使いに売ったりもするのよ。薬草が生えているところに近いからここに住んでいるのです」

「魔法使い……」

騎士はそれに何か意味を見出したらしい。かすかに首をかしげ、何か言おうとした。しかし何も言わなかった。

「それより、あなたは一体どうしてあんなところで雨に打たれておいでになったのですか。騎士というのはどなたかにお仕えしているものだと思っていましたが」

騎士がこの問いに答えるまでには長い時間がかかった。ミアンは立ち上がったことを聞いてしまったかと後悔し、言いたくなければ言わなくてもいいと言おうかどうしようか迷い、やっぱり言おうと決めた時、騎士が干からびた声で話し始めた。

「そうだ。騎士とは心から忠誠を誓うと決めた方に仕えるのだ。私もかつてはそうであった。…

...遠い物語だ」

騎士は再び黙り込み、ミリアンがまたうとうとしたところに思い出したように語り始めた。「昔、ある国に一人の王がいた。この王は病的なまでに猜疑心の強いお方だった。弟君が無類のお人好しで、他人にだまされてばかりいるのを見ていたせいもあったのだろう。家来も親族も誰一人信じることができなかった。

そんな王が、唯一無二のぜったい忠誠を誓う家来を手に入れたくて、ある魔法使いのもとを訪ねたのだ。魔法使いは王の疑いの心を取り出して一人の騎士を創り上げた。その騎士は鎧でできていた。人を信じぬ王の心でできた鎧だ。

騎士は忠実に王に従った。王だけに。王だけを守って時を過ごしたのだ。それなのに王は死んでしまった。騎士に守られていたおかげで、毒を飲まされたり、暗闇で襲われたりすることなく天寿を全うしたのだがな。

それでも騎士には王の死がひどい裏切りのように思われたのだ。王が死んでしまえば自分も消えてしまうのだと騎士は思っていた。王の心から創られたことは騎士も知っていたから。

ところが騎士は消えなかった。消えずに、死んでしまった王に怒っていた。そして気づいたのだ、自分がここに在ることを。王がいなくなってしまうても、その心から創られた自分はここにいる。このことは騎士を途惑わせ不安にした。

と同時にいろいろなことがわかってきた。

周りの者たちは騎士の存在を疎んじていること。王が亡くなれば騎士になんの力もないこと。それどころか居場所もなく、追い出されるか、悪くすれば騎士をも亡きものにしようとするだろうこと。騎士は王の死でゴタついている城をなんとか脱け出した。とにかく逃げようと思ったのだ。逃げてどうするというあてもなかった。行く先もなかった。城にはいられないという思いだけだったのだ。

.....騎士はどこへ行けばよいのであろうな.....」

最後は小さくつぶやくように言うと、騎士はまた深く沈黙した。

嵐がひどくなってきたようだった。風が唸りを上げて小屋の周りで吹きすさび、窓の木戸を揺さぶった。まるで小屋の中に入りたがっているかのよう何度も何度も木戸を揺すり、ついには大きな音を立てて窓を開けた。

ミリアンはあわてて立ち上がり、吹き込んでくる雨や風に押されながら窓を閉めた。そのとき、風に流されたらしい小さな蝶が部屋の中へよたよたと飛び込んでくるのが目の端に映った。

こんな季節に蝶がいるなんて珍しい。今夜は珍しい客が来る夜だとふと可笑しくなった。

顔にかかった雨をぬぐい暖炉の前に戻ると、騎士は頭を垂れて椅子に沈みこんでいた。

ミリアンは心から騎士を気の毒に思った。いかめしい鎧姿の騎士が行く先を見失って途方に暮れている様子はあまりにも痛ましく、何か言わずにはいられなかった。

「ここにいらしたらいかがですか」

言ってしまってから自分に驚いた。しかし意外といい考えかもしれないと思い直し、重ねて言った。

「鎧を脱いでここでお暮しになればよろしいんですわ」

「言ったであろう。私は鎧でできているのだ。脱ぐことはできない」

「そうでしょうか。私はそうは思いませんわ。だって考えてもみてください。もし王様の心でできているのであれば、王様が亡くなられたときにあなたも消えてしまったはずでしょう？ でもあなたは消えなかった。消えずに存在していたとあなたもおっしゃったではありませんか。それはつまり、王様とは別にあなたがいるということなのではありませんか。あなたがいるなら鎧は脱げるものになります。あなたさえその気になれば鎧は脱げるはずです」

ひよっとしたらミリアンの言葉は、騎士の痛いところを突いてしまったのかもしれない。騎士はむっとした様子で黙り込み、しばらくして口を開いた時には全く違うことを言い出したからである。

「あなたはこんな村はずれに一人で暮らしていて怖くはないのか」

自分の言葉が無視されて気を悪くしたミリアンは、つっけんどんに答えた。

「別に」

「そうか」騎士はミリアンに聞こえるようにつぶやいた。「魔法使いと付き合いがあるというからな。怖いものなどないであろう」

「どういう意味ですか」ミリアンは気色ばんだ。

「そりゃあ私は薬草を魔法使いに届けることはありますけど、そんなに深い付き合いがあるわけじゃありませんよ」

騎士はかすかにあざけりの調子をこめて言った。

「だが村人たちはそう思っておらぬのではないかな。こんなはずれに家を建てたのが何よりの証拠であろう」

ミリアン自身もそのことを考えないわけではなかった。いや、騎士に言われるまでもなくさんざん考えたあげくのことなのだ。あらゆることを秤にかけて選んだ暮らしなのである。ミリアン

は自分の選択に自信を持っていた。

「村の人たちのご厚意でここに家を建てていただいたのですよ」

騎士はいらだちを隠さずに言った。

「どうしてそんなに簡単に人を信じてしまうのだ。だまされたらどうする」

「どうもしません。自分が愚かだったと認めればすむことです。あなたは何をそんなに恐れておいでなのですか」

「すべてだ。自分が損をすること。他人に嘲笑されること。命を落としてしまうこと」

「それが王様の疑いの心なのですね」

「そうだ。それがこの鎧だ」

「でもその中には違うあなたがいる。そうではありませんか」

騎士は再び黙り込んだ。

立ち入ったことを言いすぎた、とミリアンは思った。騎士の沈黙が気づまりだった。ミリアンはなんとなく立ち上がり、入りもしない薪を継ぎ足した。

ミリアンの動きで部屋の空気が動いたのか、さきほど部屋に入り込んでどこかに止まっていたらしい蝶がふわふわと飛んだ。

蝶はかなり弱っていたらしく、よろめくように羽を動かしていた。やがて力尽きたのか、騎士の足もとに落ちるようにして止まった。そしてそのまま動かなくなった。死んでいるのではない証拠に、時折小さく羽が開く。

ミリアンの目は蝶に釘づけになった。羽の動きにあわせて息を詰める。

(がんばれ)

いつしかミリアンは心の中で蝶に声援を送っていた。ここで静養すればまた元気になれるかもしれない。

しかしミリアンの願いはあっさり砕かれた。

己の思いに深く沈みこんでいた騎士は足もとの蝶に気付かず、再び話したそうと身を乗り出した時に蝶を踏みつぶしてしまったのだ。

ミリアンは思わず悲鳴をあげた。

「なんだ。どうしたというのだ」

「足……足の下……」

「足？ 足の下がどうかしたのか」

ミリアンはがくがく震えながら騎士の足もとを指差した。

騎士は自分の足を見たが、まだ意味がわからないらしかった。

「…踏んでいます。蝶を……蝶を踏んでいるんです」

「蝶？」

やっとのことで足を持ち上げ、その足裏に張り付いている蝶の変わり果てた姿を見た騎士は、それがどうかしたのかと言わんばかりにミリアンの顔を見た。

ミリアンには信じられなかった。か弱い蝶を踏みつぶしてもなんとも思わない心。それが「王の疑いの心」なのだと思われ改めて思い知らされた気持ちだった。

踏みつぶされた蝶とミアンの悲痛な顔。それを交互に眺めているうちに騎士の中に何か気持の変化が起きたのだろう。低い声で笑い始めた。

ミアンはぎょっとして、思わず後ずさった。

「フ、フ、フ……。まこと、身を守る術を持たぬものは哀れよな。こんなたわいもない一撃で粉々だ。……やはり鎧を脱ぐことはできぬ。鎧を脱いでしまえば身を守るものが何もなくなってしまうではないか。フ、フ、フ……。危ない危ない。やはり人の言葉などたやすく信じるものではないな」

ミアンは哀しくなった。人の心は蝶ではない。蝶のように軽やかに舞うこともできるけれども、そんなにたやすく打ち碎かれるものではないと思った。

騎士には鎧を脱がない理由が必要だったのだろう。それほどまでに「鎧を脱ぐ」ことは騎士にとって恐ろしいことなのだろう。そして「恐れている」ということを認めることすらできないのだ。

ミアンは自分の無力さを悲しんだ。そして騎士を暖炉の前に残して寝室に入り、泣きながら眠ってしまった。

嵐は夜明け前に去ったようだった。窓やドアの隙間から、金色の光が差し込んでいる。鳥たちが忙しく鳴き交わす声が響いていた。

ミリアンは窓を開け放った。冷たく澄んだ空気が部屋に流れ込む。

ゆうべ、騎士をほったらかしにして寝てしまったことを思い出し、あわてて暖炉の部屋へ行った。

騎士は火の消えた暖炉の前で、昨夜と同じ姿勢で椅子に座っていた。

「おはようございます。……あの、私、ごめんなさい」

ミリアンがそっと声をかけると、騎士は夢から覚めたかのようにゆっくりと振り返った。

「寝床の支度もしないで私……、お休みになれませんでしたよね」

「……うむ……ああ、いや、いいのだ。ここで炎を見ながら考え事をしていた。もう夜が明けたのか」

「はい。今日はいいお天気ですよ」

ミリアンは少しためらってから、騎士に尋ねた。

「これからどうなさいますの？ 私は、あの、別にここにいていただいてもかまいませんのよ」

その言葉には答えず、騎士はゆらりと立ち上がった。

「一晩考えた。私に鎧を脱ぐことができるのか、と。その答えは、否、だ。私は鎧を脱ぐことはできない。鎧を脱いだ私はもはや私ではないのだ。だから、ここにとどまることはできぬ」

「そうですか」

ミリアンは落胆した。しかし、たかが一度しか話したことの無い者の言葉が騎士の心に届くとも思えなかった。もっと一緒にいて話がしたい。そう思った。鎧を脱げないと繰り返す騎士が痛ましくてしかたなかった。

それでも、騎士を引きとめることはできなかった。結局は自分の問題なのだ。いつの日か騎士が自分で決めることだ。

「では、お別れですね」

「うむ、世話になった」

ドアを開け歩きだした騎士の背に、ミリアンは言わずにはいられなかった。

「蝶は」

騎士は足を止めた。「うむ」

「蝶は、いつも踏みにじられているわけではありません。鎧を持たずとも生きていける術だってあるのです。どうぞ、そのことをお忘れにならないで。いつかその鎧を脱ぐ日がきたら、きっとまたここにおいでください。私はずっとここにおります」

「できもしない約束はせぬ。そなたもたやすく口にしないことだ。それでも…」

騎士は最後に小さな迷いを見せた。

「いつの日かそのような時がくるのであろうか」

朝の光が鎧の上で踊った。それを振り払うかのように頭を持ち上げ、騎士は森へ向かって歩き

出した。どこへとも知れず。

その後ろ姿を、ミリアンはずっと見つめていた。

鎧の騎士

<http://p.booklog.jp/book/36995>

著者：片山るん

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hyugarun/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36995>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/36995>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.